OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	無生物主語他動詞文の日中対照研究
Author(s)	麻, 子軒
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/61397
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　麻　子軒　）	
論文題名	無生物主語他動詞文の日中対照研究

論文内容の要旨

本論文の目的は、日本語と中国語の無生物主語他動詞文を比較し、それぞれの成立要因とその異同を明らかにすることである。無生物主語他動詞文とは、「鍵がドアを開けた／鑰匙打開了門」のような、無生物名詞が主語となる他動詞文のことであるが、同じ無生物主語他動詞文であっても、日中双方が成立するパターンと、どちらかが成立するパターンとがある。したがって、両言語における無生物主語他動詞文の成立メカニズムは、それぞれ異なるように考えられる。本論文ではこの問題について、まず文レベルと文章レベルという2つの観点に分けて考察することにする。

文レベルの要因に関しては、これまで主に、名詞（主語と目的語）に注目するアプローチと動詞（述語）に注目するアプローチが採られてきた。その結果、名詞と動詞はどちらも無生物主語他動詞文の成立要因として働いていることが分かっている。しかし、名詞と動詞を同じ枠組みのなかで論じた研究は見当たらない。本論文の研究方法は、先行研究の問題点を補うものとして、名詞と動詞を同時に扱う連語論的アプローチを取り入れ、日本語と中国語における無生物主語他動詞文の分類を試みる。連語とは、2つ以上の自立的な単語の組み合わせによる名づけの単位であるが、本論文では、無生物主語他動詞文も特定の名詞と動詞との結びつきによるものと想定し、「主格名詞」「対格名詞」「動詞」の3つの単語の組み合わせの関係を考える。なお、本論文での連語論は、主格名詞による結びつきも連語として認めた森山（1988）の立場に従う。さらに、日本語と中国語のコーパスから用例を収集し、その量的分布をもとに、コレスポンデンス分析という統計手法を用いて、両言語の無生物主語他動詞文の違いを明らかにする。統計上の理由により、この部分の考察はさらに、「対格名詞」が「物名詞」「事名詞」「人名詞」の3つの場合に分けて論じる。以下、それぞれの結論を簡潔に記す。

まず、対格名詞を物名詞に限定した場合、日本語と中国語の無生物主語他動詞文の成立において、述語の「再帰性」と「受影性」が共通の要因として働いていると言える。これと関連して、各タイプの名詞と結びつきやすい動詞は、その名詞の性質と深く関わっていることも分かった。例えば「風」のような「自然自律」タイプの名詞は、「受影性」の高いものから低いものまで幅広い動詞と結びついて連語を作っているが、「樹木」のような「植物自律」タイプの名詞は、もともと外部に働きかける力が弱いため、「樹木が実を結ぶ」のような「再帰性」の強い「生産」の動詞による結びつきに集中している。また、日本語では「自然自律」などのタイプの名詞が「風が音を立てる」のような「生産」の動詞による結びつきを数多く作るが、中国語では同じタイプの名詞にこのような結びつきがあまり観察されなかったことが両言語の最大の相違点である。

次に、対格名詞を事名詞に限定した場合、日中の無生物主語他動詞文の成立に関して、動詞の「再帰性」が共通の要因であること、また、対格名詞が「物名詞」の場合と同じく、各タイプの名詞と結びつきやすい動詞の種類は、その名詞の性質と深く関わっていることが明らかになった。両言語の共通点として、主格名詞が具体物であればあるほど「風が勢いを増す」のように、目で直接捉えられるそれ自体の動きを描写する再帰的な結びつきになりやすく、逆に主格名詞が抽象物であればあるほど「核戦争が文明を破壊する」のように、ほかの対象に抽象的な変化を引き起こす非再帰的な結びつきになりやすいことが挙げられる。そして、日中の相違点として、主格名詞が抽象物の場合、日本語ではほとんど「屈辱が憎悪を生む」のように、それほど影響力がなくても引き起こせる「対象出現」の動詞と結びつくが、中国語では「理智改造環境（和訳：理性が環境を変える）」のように、より大きい影響力が求められる「対象変化」の動詞と結びつきやすい点が挙げられ、主格名詞の影響力という面において日本語より中国語のほうが相対的に強い傾向が見られた。

最後に、対格名詞を人名詞に限定した場合、両言語の無生物主語他動詞文の成立要因について、動詞の「内面性」と、外面的な変化における「具体性」が共通の要因として働いているということが言える。そして、各タイプの名詞がその性質によって、結びつきやすい動詞の種類も決まっていることが分かった。例えば、「人間活動」による感情・知性のタイプの名詞は「向上心が自分を苦しめる」のように、人間の内面的な属性である「心理変化」を引き起こ

しやすい。その一方、「具体物」タイプの名詞は「ベッドが私を呼ぶ」のように、比較的外面的な属性をもつ「空間変化」の動詞による結びつきに集中している。ただ、動詞の軸の解釈（成立要因の原理）に関しては日中においてある程度の共通性が見られたが、各動詞と結びつきやすい名詞のタイプは両言語では多少の相違点も存在する。例えば、日本語では人間活動による生産物は「社会変化」と全く結びつかないのに対し、中国語ではそれと結びつく傾向が見られた。「社会変化」を引き起こすには、比較的強い影響力をもつ主格名詞が求められると考えられるため、日本語より中国語のほうが主格名詞の影響力が強いことが相対的にうかがえた。これは対格名詞が「事名詞」の場合でも観察された共通の現象である。また、このことは、Silverstein（1976）の名詞句階層における同じ種類の名詞句でも、言語によって異なる影響力をもつ可能性があることを示唆している。

他方、文章レベルの要因に関しては、先行研究では「視点統一」「焦点化」「表現効果」という3つの要因が挙げられているが、これには以下のような問題点がある。「視点統一」「焦点化」はどちらも前の文脈にある叙述を受け継ぎ、それを次の文に持ち込んで新たな叙述を始めるという文脈展開機能に関わるものであるのに対し、「表現効果」は行為者に意図性がないことを書き手が明示するために用いられる、文脈展開機能とは別のレベルのものである。なお、例えば「太郎が鍵を持って、その鍵を用いてドアを閉めた状態から開けた状態に変化させる」という一連の事象を言語化する際に、「行為者」の「太郎」が主語となる「有生物主語他動詞文（太郎がドアを開けた）」のほかに、「道具」の「鍵」が主語となる「無生物主語他動詞文（鍵がドアを開けた）」や、「対象」の「ドア」が主語となる「無生物主語受身文（ドアが開けられた）」「無生物主語自動詞文（ドアが開いた）」などの選択肢も考えられるが、「視点統一」「焦点化」の2要因は主語が「行為者」か「道具」か「対象」かの選択を前提にしているのに対し、「表現効果」という要因は主語が「行為者」か「道具」かの選択を問題にしている。この違いは、両者が異なるレベルに属することを裏付けている。本論文では、文章レベルによる無生物主語他動詞文の成立要因を大きく「文脈展開機能によるもの」と「表現効果によるもの」の2つに分けて考察する。そして、分類した成立要因を共通の枠にして、日本語と中国語を比較する。

調査の結果、「文脈展開機能によるもの」には、「視点統一」「焦点化」「連鎖事象」「列挙」の4つの下位分類があり、「表現効果によるもの」には、「行為者不在」「行為者特定困難」「行為者不特定多数」「行為者意図性なし」「臨場感演出」の5つのパターンがあることが分かった。前者は、すべて先行文脈の内容を何らかの形で、次の文脈に持ち込んで展開させていくという機能をもつ。そのうち、「視点統一」「焦点化」は先行研究でも提示されたものだが、「連鎖事象」「列挙」は本論文による独自の分類である。後者は、共通するところとして、書き手が行為者を主語に出さないことによって、何らかの効果が得られるという点が挙げられる。先行研究の熊（2014）で述べられている「表現効果」はそのうちの1つである「行為者意図性なし」に属しているにすぎず、ほかにもさまざまなパターンが存在することが明らかになった。

これらの9要因を共通の枠にして、日中両言語をロジスティック回帰分析で比較すると、両言語における無生物主語他動詞文の成立要因として「行為者意図性なし」「行為者不在」「行為者特定困難」の3要因が挙げられる。これらは、どれも無生物主語他動詞文でなければ表現できないか、または表現しにくいものである。そのほか、先行研究で挙げられた「視点統一」は予想に反し、日中とも無生物主語他動詞文の成立を妨げる要因であることも確認された。また、日本語と中国語では特有の要因として、それぞれ「連鎖事象」と「臨場感演出」が挙げられる。特に「連鎖事象」という要因は、従来日本語では成立しにくいと言われている「鍵がドアを開けた」のような無生物主語他動詞文が、「太郎が鍵を鍵穴に差し込んで（発端）、カチャッという音がして、鍵がドアを開けた（結果）」という文脈においては成立可能であることを示唆しているのである。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　麻　子軒　）			
	（職）		氏　名
論文審査担当者	主 査	大阪大学　教授	石　井　正　彦
	副 査	大阪大学　教授	渋　谷　勝　己
	副 査	大阪大学　准教授	三　宅　知　宏
	副 査	京都工芸繊維大学　教授	水　野　義　道

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　無生物主語他動詞文の日中対照研究

学位申請者　麻　子軒

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　石井　正彦
副査　大阪大学教授　渋谷　勝己
副査　大阪大学准教授　三宅　知宏
副査　京都工芸繊維大学教授　水野　義道

【論文内容の要旨】

本論文は、日本語と中国語の無生物主語他動詞文を比較・対照し、それぞれの成立要因とその異同を明らかにすることを目的としたものである。論文の本体は４部 11 章から構成され、他に参考文献を付する。全体の分量は、Ａ４判 127 頁、400 字詰め原稿用紙換算約 480 枚である。以下、本論文の構成に従ってその要旨を記す。

「第１部　序論」は３章から成り、研究の目的・対象、採用する理論の枠組み、調査・分析の方法論について述べる。無生物主語他動詞文の成立要因の究明は、これまでの「名詞句階層説」「他動性説」のように名詞（主語と目的語）あるいは動詞（述語）の一方に注目するだけでは不十分であり、名詞と動詞とを同時に扱う「連語論的アプローチ」が必要であること、また、文レベルだけでなく文章レベルの成立要因をも検討し、両者を関連づける必要があるとした上で、研究対象とする無生物主語他動詞文のタイプを「主格名詞」「対格名詞」「他動詞」の３単語による組み合わせとし、日中それぞれの大規模コーパスを用いた調査と多変量解析を中心とする計量的な分析とによって、両言語の異同をより客観的に解明することを目指すとする。

「第２部　文レベルの成立要因」は５章から成り、方法論とする連語論的アプローチについて説明を加えた後、対象とする無生物主語他動詞文を対格名詞の別（物名詞・事名詞・人名詞）によって３種に区分し、それぞれの調査と分析をまとめる。調査はいずれも、日中それぞれの大規模コーパスから得た用例を連語論的アプローチによって分類し、その量的分布をコレスポンデンス分析で解析することにより、日中両言語の異同を明らかにする、という手順で行われる。結果として、対格名詞が物名詞である場合には動詞の「再帰性」と「受影性」が、事名詞である場合には動詞の「再帰性」が、人名詞である場合には動詞の「内面性」と「具体性」が、無生物主語他動詞文の成立において日中両言語に共通する「原理」として働いていることが明らかになったとする。両言語の違いは、こうした共通の原理の下で、どのような名詞と動詞との組み合わせが生産的（一般的）かという点、たとえば、対格名詞が物名詞である場合、日本語は「自然自律」の主格名詞と「生産」の動詞との結びつきを数多く作るが中国語には少ないこと、対格名詞が事名詞である場合、「抽象物」の主格名詞は日本語では「対象出現」の動詞と結びつくが中国語では「対象変化」の動詞と結びつきやすいこと、対格名詞が人名詞である場合、日本語では「生産物」の主格名詞は「社会変化」の動詞と結びつかないが中国語では結びつくなど、に現れるとする。

「第３部　文章レベルの成立要因」は２章から成り、はじめに、無生物主語他動詞文の文章レベルの成立要因を「文脈展開機能によるもの」と「表現効果によるもの」との２種に分け、前者をさらに「視点統一」「焦点化」「連鎖事象」「列挙」の４類に、後者を「行為者不在」「行為者特定困難」「行為者不特定多数」「行為者意図性なし」「臨場感演出」の５類に下位区分した後、日中それぞれのコーパスから得た無生物主語他動詞文の用例を（対照群とする「有生物主語他動詞文」の用例とともに）この２種９類の枠組みで分類し、得られた量的分布をロジスティック回帰分析により解析して日中両言語の各要因の重みを比較する。分析の結果、「行為者意図性なし」「行為者不在」「行為者特定困難」の３種が両言語に共通する成立要因として、また、「連鎖事象」は日本語に、「臨場感演出」は中国語にそれぞれ特有の成立要因として挙げられるとする。

「第４部　結論」では、無生物主語他動詞文の成立における文レベルの要因・文章レベルの要因それぞれの検討結果をまとめ、今後の課題について述べる。

【論文審査の結果の要旨】

無生物主語他動詞文の成立要因に関する日中対照研究として、本論文は以下の３つの点で評価できる。第一に、連語論的アプローチという理論的な枠組みを採用している点である。この方面の代表的な研究には、角田太作による名詞重視のアプローチ（名詞句階層説）、および、熊鶯による動詞重視のアプローチ（他動性説）があるが、本論文は、それらの成果を認めつつも、無生物主語他動詞文は、名詞（主語・目的語）か動詞（述語）かの一方だけによるのではなく、両者が互いに影響し合うところに成立すると考える。こうした想定はきわめて妥当なものだが、名詞と動詞とを同時に扱う理論的な枠組みをどう設定するかが問題となる。本論文が採用した連語論的アプローチは、この問題に対する有効な解決策になっている。第二に、文レベルの成立要因と文章レベルの成立要因とを区別し、両者をともに検討している点である。両者の区別自体は熊鶯によるものであり本論文の創見ではないが、本論文では文章レベルの要因を文脈展開にかかわるものと表現効果にかかわるものとに分離し、さらにそれぞれを計９類に下位区分することで、文レベルだけでなく、文章レベルの成立要因の分析をも充実させることに成功している。第三に、大規模コーパスにもとづく実証的な記述方法と、多変量解析を中心とする計量的な分析方法を採用している点である。このことは二つの面で効果をあげている。一つは、名詞と動詞を同時に扱うことで（一方だけを扱うことに比べてきわめて）複雑になった要因の発見や検討を容易にすること、いま一つは、日中両言語の比較・対照に、より大きな客観性・実証性を与えることである。以上３点の、主に方法論的な特長により、本論文は、無生物主語他動詞文の文レベル・文章レベルの成立要因を一定の説得力をもってとりだすことに成功していると言える。

ただし、本論文には、克服すべき課題も残されている。最も大きな問題は、文レベルの要因と文章レベルの要因とがどのような関係にあるのか、ほとんど検討されていないことである。これには、本論文が「文章レベル」とみなす諸要因の位置づけになお検討の余地があること、また、上述の第三の特長の裏返しになるが、コーパス言語学・計量言語学にもとづく方法論を採用したために、要因の探索・発見が中心となり、その理論化に及んでいないということも関係するだろう。理論化ということで言えば、本論文の文レベルの要因と、角田の名詞句階層説や熊の他動性説との関係が十分に示されていないことも問題である。このほか、名詞と動詞以外の文成分の影響、ジャンルや文体の影響など、無生物主語他動詞文の成立要因に関係し得る諸側面の検討も必要であろう。

とはいえ、本論文が、上述したように、無生物主語他動詞文の成立要因の究明とその日中対照に重要な新知見を加えたことは明らかであり、上の課題も今後の研究の方向性を示すものでこそあれ、その価値を損なうというものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。